

Title	福澤諭吉の「清英交際始末」とアロー戦争・太平天国
Sub Title	On "Shin-Ei-Kosai-Shimatsu" 清英交際始末 (A history of Anglo-Chinese relations) : Yukichi Fukuzawa's views on the Arrow War and the Taiping Rebellion
Author	和田, 博徳(Wada, Hironori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.43(205)- 60(222)
JaLC DOI	
Abstract	Yukichi Fukuzawa 福沢諭吉, who contributed to the modernization of Japan, published a book named Shin-Ei-Kosai-Shimatsu 清英交際始末 (A History of Anglo-Chinese Relations) in 1869. As this book has been paid least attention among his works, the content of it has not been well known to us. There has been misunderstanding that the content of this book deals with the Opium War, but in my opinion it dealt with the Arrow War. Though many books on the Opium War had been published, few on the Arrow War, when he published this history. So, I esteem his role to make known the Arrow War to Japanese people through this book. He also showed his concern on the Taiping Rebellion which occurred at the same time of the Arrow War. He added number of valuable descriptions on the Taiping Rebellion in his other book. I would refer to the facts that Fukuzawa's famous principle of Independence and Self-Respect came from his deep concern to the affairs in China and Asia.
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤諭吉の「清英交際始末」とアロー戦争・太平天国

和田博徳

一

福澤諭吉の著書は「西洋事情」・「学問のすゝめ」・「文明論之概略」等を初め、有名なものはもとより、あまり有名でないものでも既にその内容や意義は大概明らかにされている。しかし、こゝに採り挙げた「清英交際始末」は同じ福澤の著書でありながら、これまで不思議にも人の注意を惹いたことがなく、研究されたこともなかつたので、その内容や意義が未だ少しも知られていないようである。

ところが、私には此の「清英交際始末」は福澤の他の多くの著書と同様に、やはり重要な価値をもつ本であるように思われる。よつて、こゝに「清英交際始末」の内容と意義を始めて明らかにし、あわせてアロー戦争や太平天国のような東亜近代史上の諸事件に対して、福澤が示した深い関心について述べてみたいと思う次第である。

二

福澤諭吉の「清英交際始末」は「福澤諭吉全集」全二十一卷（昭和三十三年—三十九年、岩波書店刊）の第二卷の中に収

録されており、この第二巻の巻末の「後記」には本全集の編纂者、富田正文博士の執筆された同書の解題が見えるが、その全文を示せば左の如くである。

清英交際始末 木版半紙判二冊本。二二×一五・五cm。表紙は濃藍色、鞆形凹つなぎの地紋。左上隅に、子持野の枠の中に「清英交際始末 上」(下)と記した題箋を貼る。見返しは黄色の和紙を用ひ、子持野の大枠の中を簡単な飾り野で縦三行に割り、中央に「清英交際始末」と大書し、右に「福沢諭吉閱／松田晉齋訳」と並記し、左に「明治二年／己巳初夏／尚古堂発兌」と記してある。

上巻は、序文一丁、識語の年月は「明治己巳春二月」とあるから、二月の脱稿で初夏(四月)の上梓と思はれる。凡例一丁、附録一丁半、目録半丁、本文十七丁。本文はこの上巻で終り、下巻は関係条約の全文のみを掲げ、第十八丁から第五十二丁まで、奥附はない。

本全集では明治版全集を原拠とし、右の版本を参照して校訂した。(註¹)

この富田博士の書誌学的解題によつて、明治二年(一八六九年)に作られた「清英交際始末」の初版本の体裁や丁数などをよく知ることが出来るであろう。しかし、この中の「福沢諭吉閱／松田晉齋訳」という記述はなお一応の説明を要するかも知れない。この記述を文字通りに解すれば、「清英交際始末」は松田晉齋の訳書であつて、福沢はその単なる校閲者に過ぎないことになるからである。しかし、これはよく知られている如く「福沢全集緒言」の末尾に、福沢がみずから「著訳書中の二三、其旧版に他人の姓名を記し、又は諭吉立案、何某筆記など巻首に掲げたるは、当時様々の事情に任せて他名を用ひたることなれども、今回は改めて実名諭吉の文字を現はしたり。読者之を諒せよ。」と断つて(註³)いるように、彼が他人の名義を用いて出版した一例なのである。故にこの「福沢全集緒言」を載せて福沢の生前に刊行された明治版「福沢全集」(全五巻、明治三十一年、時事新報社刊)第二巻に収録の「清英交際始末」には松田晉齋の名を全く抹消して、たゞ福沢諭吉訳とだけ記してある。松田晉齋は福沢の門弟の一人であるが、もし「清英交際始末」が真実に松田の執筆であれば、門弟を深く愛し著作権を最も重んじた福沢のことであるから、このように松田の名を抹消して自分の全集の中に

収録してしまう筈がない。したがって、「清英交際始末」が福沢自身の手に成つたものであることは極めて明白であり、富田博士が右の解題において、「福沢諭吉閱／松田晉齋訳」という記述の説明を省略されたのも恐らくこの為めであろう。

ところで、この福沢自身が執筆した「清英交際始末」は一体如何なる内容の本であろうか。従来、「清英交際始末」は福沢の多くの著作の中で最も軽視されていたので、たゞ題名から清英両国の交渉について記した本であろうと想像するに止まり、その具体的内容について特に注意したものもなかつた。例えば石河幹明氏の大著「福沢諭吉伝」全四巻においても「清英交際始末」の書名を挙げるのみで、その内容には一言も触れていない。また前掲の富田博士の解題も「清英交際始末」の初版本の書誌学的記述だけで、その内容については何も述べられていないのである。けれどもその後、富田博士は福沢の各著書に関する解題を一冊にまとめて、「福沢諭吉書誌」（昭和三十九年、大塚巧芸社刊）を著わし、その中で「清英交際始末」については前掲の書誌学的記述に左の如き短かい文を増補された。

「清英交際始末は」阿片戦争の始末およびその後のイギリスと清国との外交関係の経緯を敘し、これに関連する英清条約の訳文を添えたものである。（註⁴）

この富田博士の短かい文は恐らく「清英交際始末」の内容に具体的に触れた従来唯一のものであり、その意味では貴重な記述と言うことが出来よう。ところで、富田博士がこの記述を載せた「福沢諭吉書誌」はその書名の通り、福沢の各著書の書誌学的考察を主眼とし、各著書の内容の説明は成るべく簡潔を旨とされたく、そのため「清英交際始末」の内容についての説明が右のように短かいのも已むを得ないであろう。しかし、私は従来無視されてきた「清英交際始末」を人に知らせるために、その内容をできるだけ詳しく説明しなければならぬと考える。

右の富田博士の内容説明を読んだ人は、「清英交際始末」を阿片戦争およびその結果として清英両国間に結ばれた南京条約のことなどについて記した本であると思うであろう。清英両国の交渉は十七世紀以来二百数十年の長い間にわたっ

て、幾多の事件が起こつたが、その中で一般に最もよく知られた重要な事件は阿片戦争と南京条約であるから、「清英交際始末」という書名を見れば、誰でも先ず此の本は阿片戦争の始末や南京条約のことなどを書いたものと考えるに相違ない。ところが私の見るところでは、「清英交際始末」は決して阿片戦争の始末や南京条約などについて記した本ではない。なるほど、部分的には阿片戦争や南京条約のことに触れている個所もあるが、「清英交際始末」を全体的に読めば、それとは別のことを書いた本であることが分かるのである。然らば一体、「清英交際始末」は如何なることを書いた本であろうか。それを明らかにするには、この本の内容を以下に改めて検討する必要がある。

三

「清英交際始末」の内容を検討するために、初めにその巻頭に見える目録を示すと、左の如くである。

目 録

- 一 両国和戦の紀事
- 但 鴉片の事
- 広東の事
- 天津の事
- 北京の事
- 一 両国条約書
- 但 本条約
- 続増条約

附録

この目録に掲げるように、「清英交際始末」は「両国和戦の紀事」と「両国条約書」の二部から成り、その内「両国和戦の紀事」が上巻に、「両国条約書」が下巻にそれぞれ相当しているので、先ず上巻の「両国和戦の紀事」から見て行くことにする。ところで、奇異なことに、この上巻の「両国和戦の紀事」の本文は末尾に附された三行の短かい挿記を除く(註)と、冒頭から末尾に至るまで文章全体が切れ目なく続き、その間に改行や段落が一つもない。したがって目録には「鴉片の事」、「広東の事」、「天津の事」、「北京の事」という四節に分けてあるが、これは目録に見えるだけで、本文の方はこの四節に少しも区分されておらず、四節それぞれの範囲が本文の中のどこからどこまでを指すのかが一向に明瞭でないのである。

このように「両国和戦の紀事」の本文全体に一つの改行も段落もなく、各節の範囲が明瞭でない点は、「清英交際始末」の初版本以来、その後のどの「福沢全集」収録本も同様で、最近の「福沢諭吉全集」にもそのまま踏襲されている。この「両国和戦の紀事」は、これを収録した「福沢諭吉全集」第二巻の頁数で言えば、全体で僅か十頁程を占めるに過ぎないが、それでも十頁に及ぶ長い文章の間に改行や段落が一つもないというのは頗ぶる異様であつて、甚だ読み難い感じを与えるのである。そのため「清英交際始末」の上巻「両国和戦の紀事」は、一般に平易を以て知られる福沢の著作としては例外的に親しみ難いものであるが、これは比較的馴染の薄い中国の清朝時代に関するその記述と相俟つて、従来、読者の興味を惹かず、内容や意義が理解されなかつた重要な原因であろう。

かくして、「両国和戦の紀事」を理解するには、先ず目録にのみ見える四節がそれぞれ本文のどの部分に当るかの範囲を明らかにして、各節の内容を知る必要がある。そこで、「両国和戦の紀事」を目録の四節に従つて区分した範囲を最近の「福沢諭吉全集」第二巻の頁数・行数によつて示し、それに対応する各節の内容を略記すれば左の如くなる。

(一)、鴉片の事

(範囲) 五四五頁一行目から五四七頁四行目まで。

(内容) 十七世紀から十九世紀中頃までの清英交渉史の概略が極めて簡単に記してある。

(二)、広東の事

(範囲) 五四七頁四行目から五四九頁五行目まで。

(内容) 一八五六年に広東で起こったアロー号事件を機として、アロー戦争が始まつてから一八五八年に天津条約が調印されるまでの経過が記してある。

(三)、天津の事

(範囲) 五四九頁五行目から五五〇頁一六行目まで。

(内容) 天津条約批准のため一八五九年に中国へ来た英仏両国全権の率いる艦隊に対して、清軍が天津附近の大沽で攻撃した事件(大沽事件)について記してある。

(四)、北京の事

(範囲) 五五〇頁一六行目から五五四頁五行目まで。

(内容) 大沽事件で戦闘が再開し、一八六〇年に英仏連合軍が北京を占領して、清国と北京条約を結びアロー戦争が完全に終了するまでの事情を記してある。

このように「両国和戦の紀事」を目錄の各節に区分して読むと、全四節の内、第二節以下の三節は一八五六年から一八六〇年までのアロー戦争について記していることが明らかになる。そして残る第一節「鴉片の事」も題名にこそ鴉片(阿片)と称してはいるが、決して阿片戦争について専ら記したものでなく、実は十七世紀から十九世紀中頃までの清英交渉史の概略を説いて、第二節以下のアロー戦争に関する記述の前段としたものに過ぎないことが分かる。したがって、阿片

戦争や南京条約については、第一節「鴉片の事」の最後の部分に一寸触れているだけで、「両国和戦の紀事」の全体としては専らアロー戦争について記述したものであることが知れるのである。

以上によつて、「清英交際始末」の上巻「両国和戦の紀事」は阿片戦争に関する記述ではなく、それより十数年も後に起こつたアロー戦争の始末を説いたものであることが判明したが、それでは同書の下巻「両国条約書」は如何なる内容であろうか。この「両国条約書」は目録に示す如く「本条約」・「続増条約」・「附録」の三部に分かれているので、先ず「本条約」から見て行くことにする。「本条約」は全部で五十六箇条から成る条約文の翻訳であるが、その最後に「清国咸豊戊午年五月十六日、英国一千八百五十八年六月二十六日」にこの条約を調印したということが記されている。これは言うまでもなく、アロー戦争に敗れた清国が英国と講和のため結んだ天津条約調印の日付なので、この「本条約」とは清英間の天津条約の翻訳であることが容易に知れる。(註6)

次に「続増条約」というのは全部で九箇条から成る条約文の翻訳であるが、これもその最後に「清国咸豊十年九月十一日、英国千八百六十年十月二十四日」という条約調印の日付が見える。これはアロー戦争を完全に終了させた北京条約調印の日付に当るので、「続増条約」とは清英間の北京条約を指すことが分かるが、それでは「両国条約書」の最後の「附録」というのは何であろうか。この「附録」もその内容はやはり条約文の翻訳であるが、これには「本条約」や「続増条約」と違つて、条約調印の日付がどこにも見えない。しかし、この「附録」の冒頭の「以前禁制品の売買規則」という条項を見ると、その中に清国で以前禁止していた阿片貿易を今後は公認する旨が書いてある。周知の如く清国では阿片貿易を禁止したために、イギリスとの間に阿片戦争が起こつたが、その敗戦後も依然として阿片貿易を許さなかつた。清国がこの条項に見える如く阿片貿易を公認するに至つたのは、再びアロー戦争に敗れてイギリスとの間に結んだ上海税率協

定の結果である。そこで「両国条約書」中の「附録」とは此の上海税率協定であることが判明するが、この上海税率協定は先に調印された前述の天津条約の規定に基づき、一八五八年十一月八日に結ばれたものなので、福沢は天津条約を「本条約」とし、これをその「附録」と呼んだのであろう。また同様に北京条約は天津条約に続いて、その増補として結ばれたので「続増条約」と称したものと考えられる。

かくして、「清英交際始末」の下巻「両国条約書」に見える「本条約」・「続増条約」・「附録」はそれぞれ清英間の天津条約・北京条約・上海税率協定であることが判明したが、これらの条約や協定は悉くアロー戦争に関連して結ばれたものであつて、阿片戦争関係のものは一つもない。そして既に明らかにしたように、「清英交際始末」の上巻「両国和戦の紀事」もアロー戦争に関する記述であるから、「清英交際始末」は上下全巻すべてアロー戦争について専ら記しており、決して阿片戦争の始末やこれに関連する英清条約のことなどを述べたものでないことが知れたであろう。

四

それでは福沢が「清英交際始末」のようなアロー戦争に関する専書を刊行した意図は何であつたらうか。それを知るために、「清英交際始末」の巻頭の序文を見ると、左の如く記してある。

粵に清英の交りを稽ふるに、清人の耳目、其及ぶ所甚だ狭く、清人の轍迹、其至る所甚だ僅かにて、曾て英国の強富を知らず、猥りに之れを藐視して勁敵とも思はず、自ら誇て華夏と云ひ、英を称して夷戎と為し、其動作却て反覆無信にして、軽しく罅隙を開き、其開く毎に必ず敗を取り、遂に兵は益々弱く国は益々貧しく、萎靡不振の今日に至る。実に愍れむべし。抑々其失錯を追思するに、小事は縷挙に暇あらず、其大に至ては、乃ち鴉片の事あり、広東の事あり、又天津と北京との事あり。之れに由て両国の条約屢々改まり、且清より償金を出せしことも一度ならざるなり。

試に巻を開て之を看ば、清英交際の始末、其概如何を知り得べし。嗚呼此事や我に関からざるに似たりと雖ども、畢竟唇齒の隣国に於て斯る始末あるを知らずして可ならん歟。希くは看官之れを忽かせにせざれと云爾。

維時明治己巳春二月

慶応義塾同社 誌

この序文を読めば、福沢は清国人が英国の文明富強を悟らないで、みだりに戦争して敗れた事実を明らかにし、これを我が日本人への鑑戒とするために「清英交際始末」を刊行したことが知られる。「清英交際始末」が刊行された明治の初め頃は幕末以来の攘夷思想が未だ根強く残っており、排外的言動が横行していたので、福沢はこのような思想や言動のもたらす危険な結果を憂えて、中国の前例によつて我が日本人に警告しようとしたものと考えてよいであろう。

しかし、福沢の著作の意図が西洋列強に対する清国の無謀な戦争とその悲惨な結果を示すことによつて、日本人の攘夷思想や排外言動への警告とするためであつたならば、「清英交際始末」の内容を特にアロー戦争に限定する必要はなく、阿片戦争についても同様に記述した方がより効果的ではなかつたろうか。周知の如く中国は阿片戦争に先ず敗れ、次いで再びアロー戦争に敗れて半植民地化への方向に進んだのであるから、アロー戦争よりも寧ろ半植民地化への第一歩であつた阿片戦争について書いた方が、福沢の右のような意図は一層明瞭にあらわすことが出来たのではないかと思われる。而もまたアロー戦争における清国の相手はイギリスだけでなく、フランスも加わっていたので、本来「清英交際始末」という書名を掲げてアロー戦争のことを書くのは、厳密な意味では正しくないと言えよう。従来、「清英交際始末」は阿片戦争の始末を書いた本であるように誤解されたのも、誰もがその書名を見てフランスの加わつたアロー戦争とは思ひもよらず、ただ清英両国間のみで行なわれた阿片戦争だけを念頭に浮かべたからに相違ない。

それにも拘わらず、福沢が「清英交際始末」という書名で専らアロー戦争を論じて、阿片戦争に関しては殆んど何も述

べていないのは一体如何なるわけであろうか。これには幾つかの理由が推測できると思う。先ず第一に一八四〇年から一八四二年にかけて起こった阿片戦争よりも一八五六年から一八六〇年までのアロー戦争の方が時期的に見て、「清英交際始末」を書いた明治二年すなわち一八六九年に遙かに近いので、それだけ身近に感ぜられる最新の事件として当時の日本人への戒しめとするのに適切であると福沢が判断したのではないかと思われる。次に第二の理由としては、阿片戦争後の南京条約等よりも、アロー戦争後の天津条約・北京条約等の方が中国に一層苛酷で惨めな結果をもたらしたから、福沢はその事実を日本人に強く印象づけようとして、ことさらアロー戦争のみを述べたのではないかと考えられる。

しかし、福沢がアロー戦争に記述を限定した更に重要な理由として、当時既に阿片戦争については日本人の著述が幾つも出ていた事実を考慮する必要がある。例えば有名なものだけを挙げて、嶺田楓江の「海外新話」、斎藤竹堂の「鴉片始末」、坂原雄の「阿片乱記」、塩谷宕陰の「隔鞞論」、早野恵の「清英近世談」等のような阿片戦争に関する日本人の著述が当時少なくなかつたのみでなく、実は福沢自身も彼の「唐人往来」・「西洋事情」・「条約十一国記」・「西洋旅案内」等の多くの著作の中で、阿片戦争については既に屢々言及したことがある。

ところが、これに反してアロー戦争については、それを専ら論じた本が当時の日本にあまり存在せず、福沢自身も未だ殆んど述べたことがない。福沢が明治二年に「清英交際始末」を書いて専らアロー戦争を述べることにした所以は恐らくこのためではなからうか。この意味において、福沢の「清英交際始末」は当時の我が国におけるアロー戦争関係の極めて稀な専著として甚だ貴重であり、明治初年の日本人が東亜の国際関係の厳しい現実を会得して、それに処して行く際の道標の役割を果したものと考えてよいであろう。

ところで、福沢がアロー戦争について「清英交際始末」のような專著まで出した理由としては、なおアロー戦争と同じ時期に中国で起こっていた太平天国の乱に対する彼の深い関心を無視することが出来ないであろう。太平天国に対する当時の日本人の関心についての問題は、既に増井経夫・市古宙三両教授等の精細な研究があるが、^(註7)しかし、福沢が太平天国に深い関心を示した事実については未だ知られていないようなので、こゝに明らかにしたいと思う。

周知の如く、福沢は幕府がヨーロッパ諸国へ始めて派遣した使節団（正使竹内下野守・副使松平石見守）に翻譯方御雇の一人として加わり、文久二年（一八六二年）正月、長崎を解纜して香港・シンガポール等の諸港を経てヨーロッパに到り、フランス・イギリス・オランダ・プロシア・ロシア・ポルトガル諸国を巡歴して同年十二月日本へ帰つて来た。「福沢諭吉全集」第十九巻に収められている「西航記」は右の遣欧使節団に参加したときの福沢の旅行日記であるが、この「西航記」を見ると、ヨーロッパへ行く途中シンガポールに寄港した日に当たる文久二年正月十九日の条に、シンガポール在住の音吉という日本人から聞いた太平天国の話が書いてある。このシンガポールで会つた音吉という日本人のことは、福沢と同行した使節団の他の人々の旅行日記すなわち野沢郁太（副使松平石見守の従者）の「遣欧使節航海日録」、市川渡（同上）の「尾蠅欧行漫録」、淵辺徳蔵（御勘定格調役）の「欧行日記」^(註8)などにもそれぞれ記されているので、福沢の「西航記」を初め、これらの旅行日記の記載などを綜合して考えると、音吉はほゞ次の様な経歴の人であつたことが分かる。すなわち音吉は尾張国知多郡小野村出身の船乗りで、天保三年（一八三四年）志摩国鳥羽から船で江戸に向かう途中、暴風に遇つてアメリカのカリフォルニアに漂着し、やがてイギリスへ送られ、次いで南シナのマカオに移り、その後永く中国の上海に居住し、シンガポール出身の婦人と結婚して三人の子供まで生まれたが、最近病氣になつたので、福沢

らがシンガポールに着く十日前に療養のため上海からシンガポールに来たと言うのである。(註9)

音吉は右のような経歴の漂流者であつたが、彼は日本の使節団がシンガポールに着いたと知つて、懐しさのあまり使節団一行の旅館を訪ねて来たので、福沢らは彼からその数奇な身上話などを聞くことが出来たのである。音吉はシンガポールに来る前、上海に居住していたから、恰もその頃上海附近を戦場とした太平天国の乱については、直接に見聞する機会も多かつたであろうと推測されるが、特に音吉が上海からシンガポールに来たのは福沢らに会う僅か十日前というから、当時としては最も新しい太平天国のニュースを彼は福沢らに話すことが出来た筈である。それでは福沢が音吉から聞いた太平天国のニュースは如何なるものであつたらうか。福沢は「西航記」の中に次の如く記している。

〔文久二年正月〕 十九日、朝第五時（午前五時）新嘉坡（シンガポール）に着す。第一時（午後一時）上陸し馬車に乗り旅館に至り、夜本船に帰る。……○旅館にて日本の漂流人音吉なるものに遇へり。音吉は尾州蔦（知多）郡小野村の舟子にして、天保三年同舟十七人と漂流して北亜米利加の西岸「カリホルニー」に着し、其後英（国）に行き、英国の戸籍に属して上海に住し、新嘉坡の土人を娶り三子を生めり。近頃病に罹りて摂生の為め十日前本港に來り、偶ま日本使節の來るを聞き來訪せり。……○音吉支那の近況を説くに、去年七月咸豐帝殂し、太子位に即き、同治帝と云。年七歳なり。内外の事務は尽く帝の叔父恭親王に委任す。去年英仏との戦争は事既に平ぎたりと雖ども長髪の賊勢益々盛強にして、方今其兵員殆ど二百万に近し。南京を根拠と爲し、江西江北諸州を陥れ、尚ほ進て北京近傍に迫り、行々諸方を侵掠し、男子年十五より四十なるものは捕て兵卒と爲し、兒女老人は或は捕へ或は殺し、過る所尽く火を放て家を焼き田野を荒らし、北京の辺六百里の地は全く人煙を絶つ。○英仏の兵は上海に屯して両端を持し、敢て賊兵を撃たず、亦た北京をも救はず、蓋し他の勝敗を見て事を謀るなり。長髪賊は進で上海に至り、兵一万を以て之を圍めり。土人皆恐怖して家を捨て英仏の軍艦に遁れり。然れども賊兵亦英仏の宿兵には敢て害を加へ

ず。○長髮賊諸州を侵掠し、男子の兵卒となすべき者を捕れば其面に烙印し、再び帰ることを得せしめず。官軍も亦面に烙印ある者を見れば捕て之を殺す。此を以て人々皆生を安んぜず、産業を修る意なし。当今上海等の交易甚盛ならず、輸出物も昔日の半に至らずと云。○長髮の賊頭朱天徳は既に死し、当今の元帥は洪秀全と云、自から天皇(天王)と称せり。其党類も人員は多しと雖ども、固より烏合の衆にして、用兵の法を知る者なし。故に英仏の軍卒、法を犯して罪あるものは、出奔して長髮に帰す。賊も亦喜て之を納れ、俸を厚くし、或は五十人百人の長となし、或は一隊の将となして之を用ると云。(註10)

右の記述の中に「去年英仏との戦争は事既に平ぎたり」と見えるのは、アロー戦争が終わったという意味であり、また「長髮賊」とあるのはもちろん太平天国を指している。この太平天国に関する福沢の記述は、今日から見れば訂正を要する箇所もあるが、当時の日本人としては太平天国の情勢を寧ろ極めて簡単に要領よく伝えたものと言うべきであろう。福沢がシンガポールに着いた文久二年(清朝の同治元年)の初め頃、恰も清朝は英仏両国とのアロー戦争が漸く片付いたとは言え、国内では太平天国の勢がなお衰えず、特に有名な忠王李秀成の率いる太平軍は蘇州・杭州等の要地を席捲して中国随一の外国貿易港である上海に迫っていたが、英仏などの諸外国は初め中立を宣言して、清朝と太平天国とのいづれにも味方しなかつた。福沢の記述はかくの如き当時における最新の中国情勢をかなり適確に把握しており、甚だ貴重な意義があると言つてよいであろう。

しかし、この太平天国に関する福沢の記述は、なお次の点において、一層特筆すべき意義があると思う。前述の如く文久二年の遣欧使節団の一行中、シンガポールで音吉に会つたのは福沢だけではなかつたので、野沢郁太・市川渡・淵辺徳蔵らの旅行日記にもそれぞれ音吉のことが見える。しかし、不思議なことに福沢以外の人々は、音吉から聞いた筈の太平天国や中国情勢について一言も記していない。これは恐らく、福沢以外の人々は太平天国の乱などに関心がなく、当時の

日本に直接関係のない中国の事件として聞き逃したり書き落してしまつたのに対して、福沢はひとり海外の事情に絶えず細心の注意を向けていたことから生じた相違であろう。文久二年の遣欧使節団に参加した他の人々がその後格別の成果を残さなかつたにも拘わらず、福沢だけは此の旅の見聞に基づいて、かの有名な「西洋事情」の大著を完成し、維新の変革に大きな影響を及ぼすに至つたという周知の事実も、右のような彼の海外事情に対する甚だ注意深い態度がもたらした当然の結果と見るべきではなからうか。

ところで、太平天国に関する福沢の記述の意義はなおこれだけに止まらない。増井教授や市古教授の研究によれば、幕末日本人の太平天国に関する知識の大部分は、当時日本に来た外国人によつて伝えられた情報であり、日本人自身の見聞に基づくものとしては、太平天国の乱のころ漂流して中国へ行つた伯耆の文太という船頭の帰国談と、幕府が貿易のため文久二年、元治元年にそれぞれ上海へ派遣した千歳丸および健順丸の乗船者たちが書いた記録等ぐらしか無いようである。その内、文久二年に幕府が派遣した千歳丸には高杉晋作や中牟田倉之助らが乗つていたので名高いが、この船は同年四月二十九日長崎を出て五月六日上海に到り、七月五日上海を発して同月十五日長崎に帰着した。^(註五)したがつて、高杉・中牟田らの千歳丸乗船者たちは文久二年五月から七月までの上海滞在期間に太平天国に関する見聞を得たのであるが、これに比べると、同年正月十九日に福沢がシンガポールで音吉から聞いた太平天国の情報の方が数箇月早いのである。

もつとも時期的に見れば、伯耆の文太の太平天国に関する帰国談は既に安政三年(一八五六年)に鳥取藩の堀熙明らによつて編纂されているので、太平天国に関する日本人の見聞記録としてはこれが最も早いことになる。しかし、増井教授によると、伯耆の文太が太平天国に関する話の材料を仕入れたのは、実に上海在留邦人第一号ともいえる音吉からであつたと言ふ。^(註12)前述の如く音吉はシンガポールに来る前、上海に永く在住していたので、後から上海へ来た伯耆の文太に色々太平天国についての見聞を話すことが出来たのであろう。故に時期も場所も異なるが、福沢と伯耆の文太とは太平天

国の情報を同じ音吉から入手したのである。このように見て来ると、福沢が記録した太平天国に関する音吉の話は短かいものであるとは言え、従来貴重視された伯耆の文太の帰国談などと共に、日本人自らの見聞による数少ない太平天国情報の一つとして貴重な意義があると言わなければならぬであろう。而もそれが近代日本の偉大な先覚者、福沢諭吉によって書き伝えられたということは、益々その意義を高めるものであるように思われる。

六

福沢の参加した文久二年の遣欧使節団は、日本の長崎から香港へ直航し次いでシンガポールに到り、上海には寄港しなかつたので、福沢は太平天国の乱を自から直接見聞する機会に恵まれなかつた。それにも拘わらず、シンガポールで太平天国に鋭い注意を向けた福沢は、その後ヨーロッパに着いてからも、なお依然として太平天国や中国情勢に対する関心を失なわなかつたようである。例えば福沢は文久二年八月朔日（一八六二年八月二十五日）ロシアの首都ペテルスブルグに滞在していたとき、コルニェブスキという医師に会つたが、それについて「西航記」に左の如く記している。

〔文久二年〕 八月朔日。魯（ロシア）の医師コルニェブスキなる者来れり。此人三ヶ月前支那北京を發し、陸路にて昨日伯徳祿堡（ペテルスブルグ）に着せりと云。……○現今支那の景況、同治帝年七歳、恭親王政を摂し、政治甚だ好し。二太后（東太后・西太后）あり、此亦国政を参り聴く。凡百日前長髮賊仏蘭西の水師提督を殺せり。此より仏英の兵共に北京を助け長髮賊を攻め未だ勝敗なしと云。（註¹³）

この中に「凡百日前長髮賊仏蘭西の水師提督を殺せり。」とあるのは、フランス海軍のプロテ（Protet）提督が一八六二年五月十七日、上海附近における太平軍との戦いで戦死した著名な事件を指すものである。次いで福沢は文久二年閏八月朔日（一八六二年九月二十四日）フランスの首都パリに滞在中、当時ヨーロッパに居た唐学墳という中国人の来訪を

受けたが、そのことを「西航記」に次の如く書いている。

〔文久二年〕 閏八月朔日。唐学墳来話す。此人は支那の人にて三年前より英語を学び且事情を探索する為め竜動（ロンドン）に來れり。日本使節竜動在留中屢々旅館に來り談話せることあり。今又仏蘭西語を学ぶ為め巴理（パリ）に來り尚一ヶ年此に留るべしと云。○唐学墳歐羅巴遊学中は衣服冠履皆歐羅巴の俗に變じ、學校に入り或は別に師を求めて学べり。竜動在留中一ヶ年の学費二百ポンド、故郷の父兄より之を送ると云。○同人話。方今支那帝少幼なれども帝の叔父恭親王叱囉呢政を摂し外国との交際甚だ好し。二、三ヶ月前より英仏の助を借て長髮賊を攻、屢々克。又英人ワルドなる者を用ひ將軍の官を与へ兵卒八千人を教へしむ。（註¹⁴）

こゝに「英人ワルド」と言うのは名高い常勝軍の最初の指揮官アメリカ人ワード（F. T. Ward）のことで、その英人とあるのは米人の誤りに相違ないが、この福沢の伝える唐学墳の話は前のロシア人医師コルニェブスキの話と共に、僅か数箇月前シンガポールで音吉から聞いた頃には、清朝と太平天国とのいづれにも味方せず中立していた英仏諸国が、その後忽ち清朝援助に轉換した事実を簡潔にあらわしている。恐らく福沢はかくの如き西洋列強の中国に対する実利的にして變転自在な帝国主義政策の一面をまのあたりにして、遠く祖国日本の運命に想を馳せ焦燥禁じ難きものがあつたと想像される。いづれにしても福沢が遙か遠くヨーロッパに居りながら、なおかつ太平天国や清朝の情勢に注意を怠らなかつたといふことは、彼の中国や東洋に対する関心が如何に深かつたかを示すものであろう。福沢が太平天国と同時期のアロー戦争に関する專著「清英交際始末」を後に刊行したのも決して偶然ではないように思われる。このような西洋列強のアジア進出や中国の内乱に対する福沢の強い関心が、やがて彼の有名な独立自尊主義へと展開したものと考えてよいのではなからうか。

以上によつて、福沢諭吉の「清英交際始末」は阿片戦争の始末などを書いたものではなく、それより十数年も後の西洋列強による侵略の脅威として更に身近に感ぜられたアロー戦争について専ら論じた当時における極めて稀な珍重すべき書物であり、またアロー戦争と同時期の太平天国の乱に対しても、福沢は日本人の中で最も早くから深い関心を示していた事実を始めて明らかにすることが出来たと思う。

とかく一般に福沢諭吉は西洋文明の鼓吹者として、西洋に深い関心を抱いていた反面、東洋に対しては冷淡で、あまり関心を示さなかつたかの如く考えられがちである。しかし、福沢は西洋に対してのみでなく、東洋に対してもまた甚だ早くから最も鋭い注意を向け、深い関心を示した人物であつたことを決して忘れてはならないであらう。

註

(1) 「福沢諭吉全集」第二卷、六八二—六八三頁。

(2) 慶応義塾塾史編纂所蔵の「入社帳」等の諸資料によると、

松田晉齋は伊豫松山藩士で、慶応元年四月義塾に入り、明治二年頃は慶応義塾の教員となつて授業を担当していた。その後明治十一年七月に鳥取中学校教諭兼幹事に就任した。

(3) 「福沢諭吉全集」第一卷、六四頁。

(4) 富田正文「福沢諭吉書誌」一五頁。

(5) 「両国和戦の紀事」の最後に、三行の短かい挿記がある。

これは一八六二年フランスがベトナムからコーチシナ三州を獲得した事件について極めて簡単に述べたもので、「清英に關からざれども、同時隣国の事に付き此に挿記す。」と言ふ

福沢諭吉の「清英交際始末」とアロー戦争・太平天国

如く、アロー戦争とは同時に起こつた事件として挿記したものである。

(6) この天津条約の翻譯において、福沢はその第八条を次の如く訳述している。

第八

□□教并□□教は素より善を為すの道にして、人を待する己の如くするの主意なれば、以後之を伝授し之を習学する者は、清国官員、其者を残害禁止するを得ず。均しくよく保護すべし。

右の「□□教并□□教」は条約の原文(漢文・英文)に照らせば、「耶蘇教(Protestants)并天主教(Roman Catholics)」であることが分かる。この第八条は中国におけるキリスト教

の解禁を定めたものであるが、「清英交際始末」の出た明治二年に日本は未だ切支丹禁制であつたので、福沢はこのように伏字を用いて譏刺したのであろう。

(7) 増井経夫「太平天国に対する日本人の知識」(「太平天国」岩波新書所収)。市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」(「開国百年記念明治文化史論集」所収、乾元社刊)。

(8) 野沢・市川・淵辺の旅行日記は何れも「遣外使節日記纂輯」第二、三(日本史籍協会刊)の中に収録されている。この内淵辺は一行より後れて文久二年二月二十一日江戸を出発し、同年三月二十四日シンガポールに着いて音吉に会つた。なお文久三年の遣仏特使池田筑後守・河津伊豆守に随行した外国奉行支配取調役田中廉太郎が同年二月二十一日付でシンガポールから発した書翰にも音吉のことが見える。(通航一覽続輯卷一〇八、続通信全覽類輯船艦門漂流部)

(9) 田保稿潔「増訂近代日本外国関係史」三一四―三一六頁。同氏「モリソン号来航及撃攘について」(史学雑誌三三一―三三二―三三五二頁)。尾佐竹猛「夷狄の国へ」(万里閣書房刊)二二―三六―三三七頁。

(10) 「福沢諭吉全集」第十九卷、一一―一二頁。

(11) 「文久二年上海日記」(全国書房刊)。

(12) 増井経夫「太平天国」(岩波新書)一〇頁。

(13) 「福沢諭吉全集」第十九卷、四六―四七頁。

(14) 「福沢諭吉全集」第十九卷、五二頁。

この「西航記」閏八月朔日の記述の覚書と思われるものが、福沢の「西航手帳」の中に見える(「福沢諭吉全集」第十九卷、八九頁)。

(附記) 本稿を草するに当り、慶応義塾史編纂所蔵の諸資料を会田倉吉主事の好意によつて閲覧し得た。こゝに記して謝意を表す。なお本稿は最近発表した拙稿「アジアの近代化と慶応義塾―ベトナムの東京義塾・中国の梁啓超その他について」(「慶応義塾大学商学部創立十周年記念日吉論文集」所収)および後日発表予定の「福沢諭吉の中国観」等の諸篇と共に、「アジア史から見た福沢諭吉に関する研究」の一部を成すものである。